

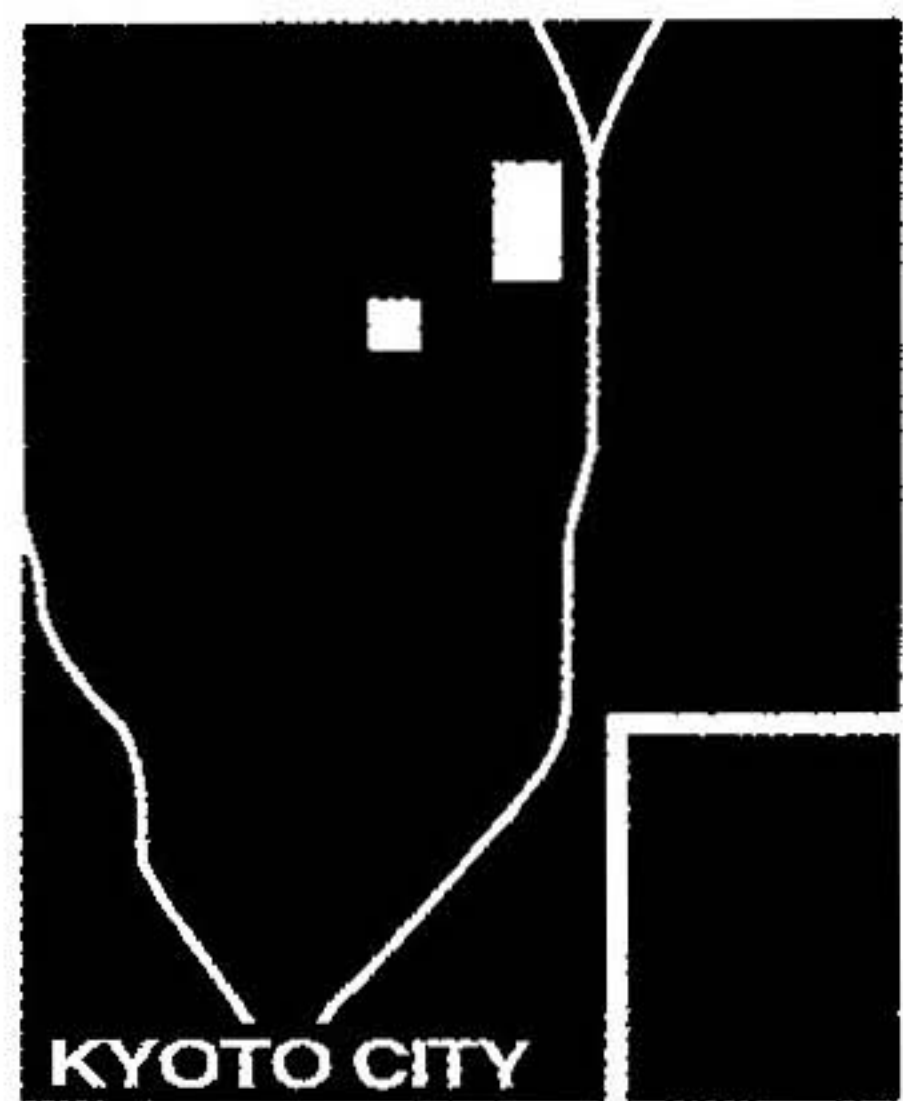
# 歴史 アトラス

ATLAS KYOTO



足利健亮 編

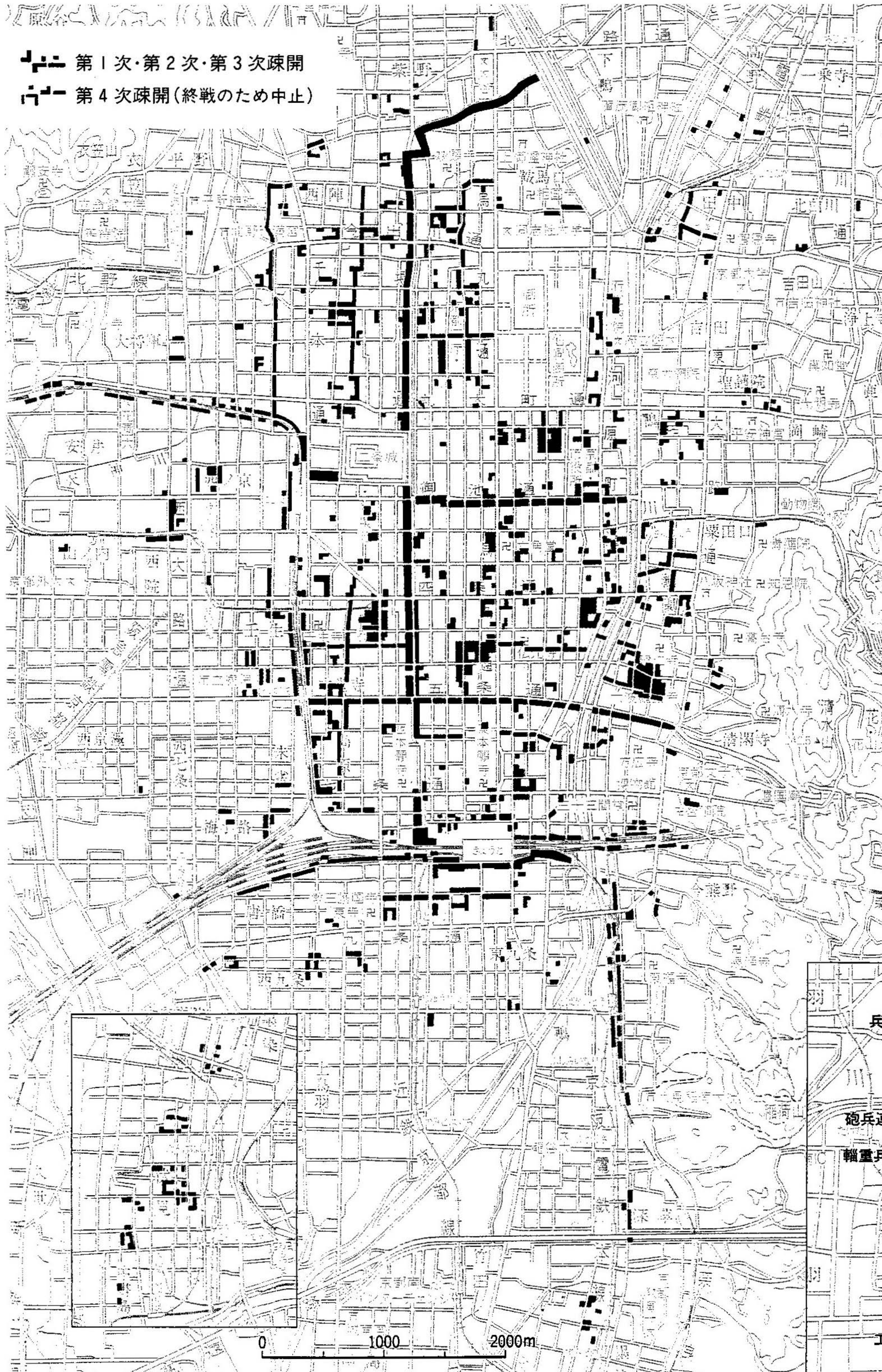






# 太平洋戦争と京都

 第1次・第2次・第3次疎開  
 第4次疎開(終戦のため中止)



京都はしばしば太平洋戦争の被害を受けなかったとされている。確かに広島や長崎のように原爆による壊滅的な被害を受けることはなかったし、東京・大阪・名古屋・横浜・神戸といった都市と比べても、被害の程度が非常に軽かったことは確かであろう。しかし、京都が太平洋戦争の影響をまったく受けずにすんだというわけでは決していない。そればかりか、京都が広島・長崎と並んで原爆の投下候補地とされていたことなども、近年明らかになりつつある。ここでは、京都に刻まれた太平洋戦争のツメ跡を、戦争以前からの軍事施設の分布などとともに振り返ってみることにする。

まず、今日の京都市内に大規模な自衛隊の駐屯地がないことからしばしば誤解されるが、近代の京都は郊外をも含めれば、それなりの軍事機能を有する都市であったことに注目したい。とくに当時の京都市の南郊には、陸軍第16師団を始めとする多くの軍事施設が集積していた。

太平洋戦争末期、日本上空がアメリカの制空権下に置かれ、各地がB29爆撃機などによる空襲を受けるようになってからも、京都は目立った空襲を受けることがなかった。しかしこのことはむしろ当初から予測できたことではなく、市当局は早くから空襲への対策に取り掛かっていた。その対策とは学校その他の公共施設の周辺の家屋、さ

▼大正11(1922)年における京都南部の軍用地  
 京都の南郊に置かれていた陸軍の諸施設の分布を、大正11年の時点で示す。第16師団(明治38年設置、京都への移駐は同41年)司令部をはじめ、師団以前から置かれていた歩兵第38連隊その他の部隊、さらには火薬製造所といった諸施設が、現在の京都市伏見区から宇治市にかけて広がっていたことがわかる。图中、ピンクで示したものは建造物をもつ施設を、黄土色で示したものは敷地だけの施設を示す。



▲建物疎開の分布(京都市建設局「建設行政のあゆみ」による)

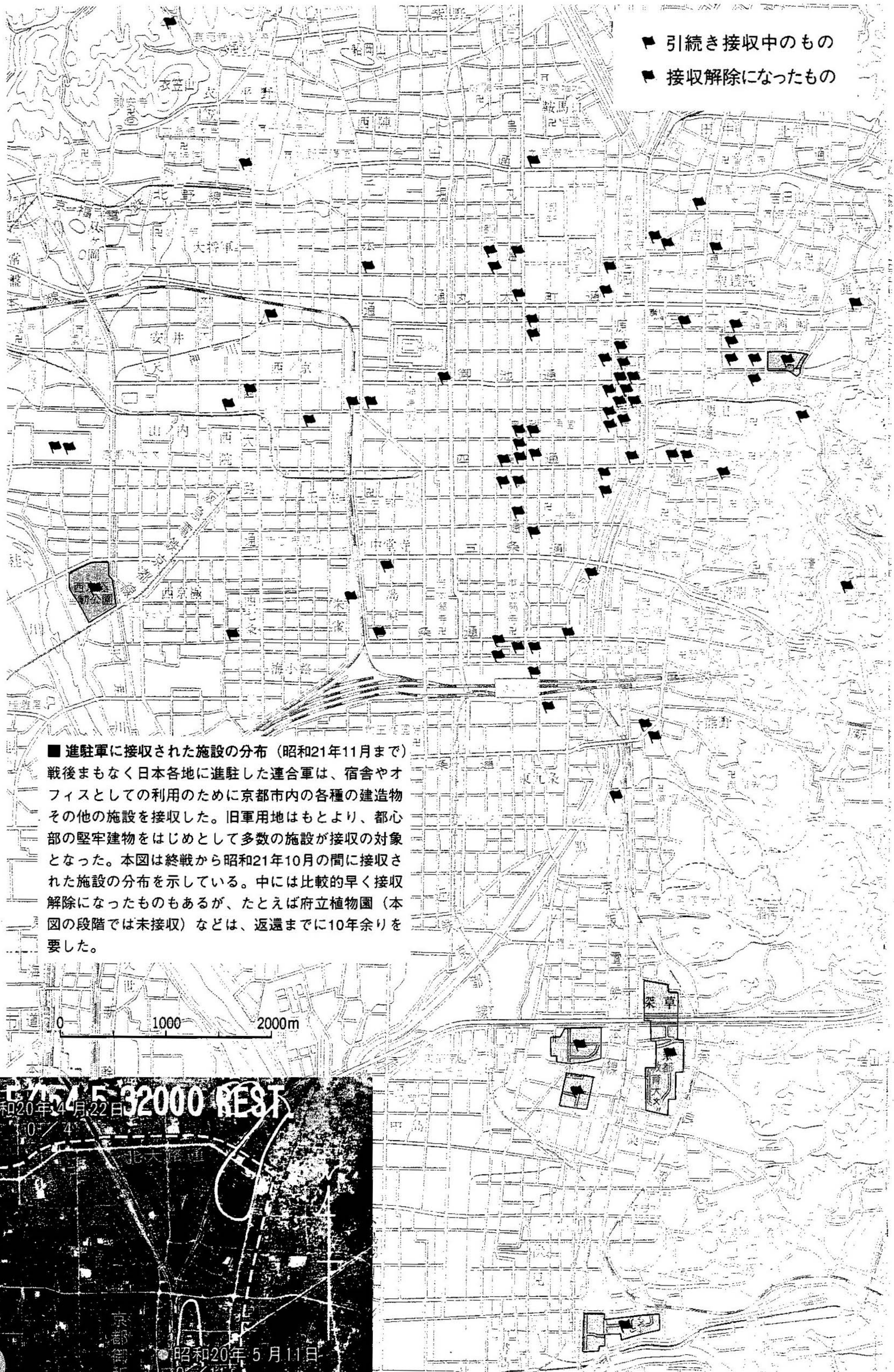
昭和19(1944)年7月に950戸が第1次の建物疎開の対象に指定されたのを始めとして、第2次は昭和20年2月(256戸)、第3次は同年3月(10500戸)、第4次は同年8月(7672戸)と続いた。第4次分は指定直後に終戦となったため、一部を除き建物の棄却は行われなかったが、中には終戦前日の8月14日に建物を取り壊したような所もあり、その住民は複雑な思いを抱いたことであろう。ただし京都の場合、昭和20年代から30年代にかけて建物疎開の跡地を利用して五条通・堀川通・御池通などの拡幅工事が行われたことは、「災いを転じて福となす」ものであった。



らには特定の道路に面する家屋などを強制的に立ち退かせ、そこを空き地として爆撃の際の延焼をくい止めようとするものであった。これを建物疎開という。この建物疎開は対象となった家屋の住民にとっては大きな犠牲を伴うものであったが、戦後になって疎開跡地の多くが新たな幹線道路となって生まれ変わったことも記しておくべきであろう。

一方、京都でも数は少ないとはいえ数回の空襲はあった。ところが、その被害については空襲直後はもとより戦後も公にされることが少なく、むしろ「京都の貴重な文化財を守るために、米軍は奈良や鎌倉とともに京都の爆撃を意図的に避けた」とする“伝説”が広く普及していた。アメリカの東洋美術史学者 L. ウォーナーが京都・奈良などの空襲を回避することを米軍に対して進言し、それが取り入れられたというのであるが、ウォーナーが貴重な文化財をもつと指摘した都市の中には激しい空襲を受けた所もあり、京都の被害が少なかったのをウォーナーの功績とすることには疑問が多い。最近では、この“伝説”は戦後の日本占領をスムーズに行うためにGHQ当局者が作為的に流したとする説も唱えられている。

説の当否はともかく、京都の被害が少なかったことの原因は、米軍内部のかなり微妙な作戦上の事情と考えるほうが真相に近いであろう。戦後50年近くを経過した今日、ようやく戦時下の京都の姿が種々の角度から解明されつつある。(山田)



■ 進駐軍に接收された施設の分布 (昭和21年11月まで)  
 戦後まもなく日本各地に進駐した連合軍は、宿舎やオフィスとしての利用のために京都市内の各種の建造物その他の施設を接收した。旧軍用地はもとより、都心部の堅牢建物をはじめとして多数の施設が接收の対象となった。本図は終戦から昭和21年10月の間に接收された施設の分布を示している。中には比較的早く接收解除になったものもあるが、たとえば府立植物園(本図の段階では未接收)などは、返還までに10年余りを要した。



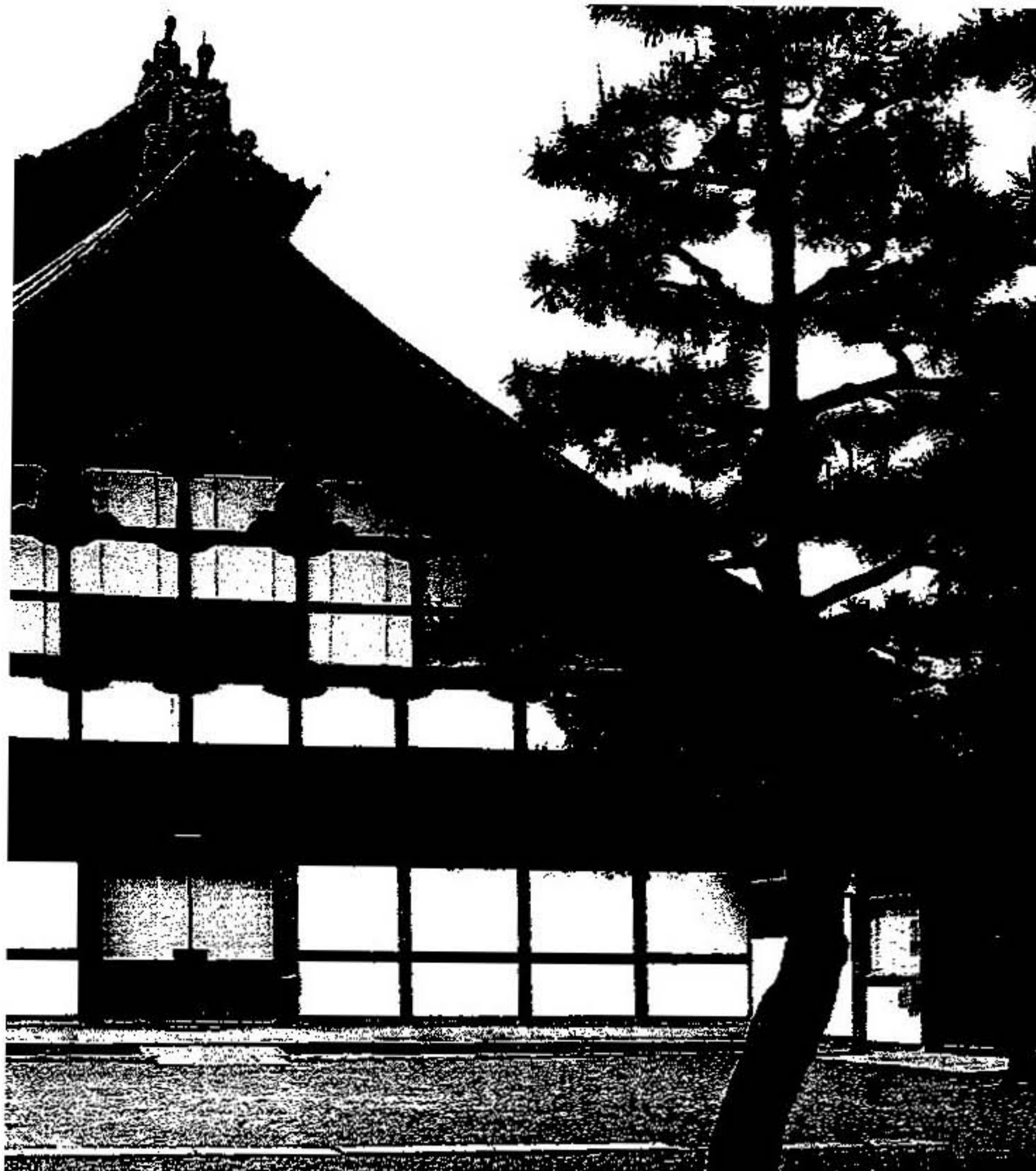
◀ 米軍空襲の被災状況 (高橋伸一監修『かくされた空襲と原爆』による) とB29からの空中写真 (O.ケリー『爆撃を免れた京都—歴史への証言—』による)  
 昭和20年には京都も数回の空襲を受けた。なかでも被害が大きかったのは1月16日の東山区馬町地区の空襲と6月26日の上京区出水地区の空襲である。しかしどちらも軍事的に意味のある地区ではなく、これらの爆撃は偶発的なものといえる。その点では、昭和20年4月16日の右京区方面の空襲のみは軍需工場を目標とするものであったと考えられる。なお、本図のベースに用いた空中写真は米軍が昭和20年4月4日に高度3万2000フィート(約9750メートル)のB29の機上から撮影したもので、「点線内は約40パーセントが商業地域」「実線で囲んだ中は工場地域」などの書き込みがある。なお、斜めに交差して見える線は写真の折り畳みによるものである。



# 京都歴史アトラス

足利健亮編

HISTORICAL ATLAS KYOTO



京都市右京中央図書館

331077353

23022013

M747AB3



中

216.2

ア